世界とつながる教室

横浜からセネガルと“つながる”

子どもたちにアフリカを身近に感じてもらいたいと
横浜市が導入する「一校一国運動」。
その一環としてセネガルと交流を続ける
横浜市立高田小学校の子どもたちの姿を追った。

日本地図の周りに“日本らしさ”が伝わるものを描く高田小の子どもたち

教室からアフリカに思いをはせる

「今年はアフリカの〝セネガル〟と交流します」

「え？アフリカ？」

「セネガルってどこ？」

そんなやりとりがあったのは、約半年前、横浜市立高田小学校の教室。この日の6時間目は委員会の時間。5、6年生が10の委員会に分かれて、それぞれの活動を行っている。この教室に集まっているのは「交流委員会」のメンバー。文字通り、地域との交流が主な活動だが、なんと次の交流先は、はるか海を越えて西アフリカの〝セネガル〟に決まった。

2008年に「第4回アフリカ開発会議（TICAD Ⅳ）」の開催地となった横浜市。地域ぐるみでTICADを盛り上げようと、市が導入した取り組みの一つが「一校一国運動」だった。大使館やJICAの関係者による出前講座、青年海外協力隊員を通じた交流などを通じて、一校につき一カ国、その国とつながっていこうというものだ。

そして2013年、5年の時を経て、TICAD Ⅴが再び横浜で開催されることになった。そこで復活したのが「一校一国運動」。今回初めて参加を決めた高田小は、セネガルを担当することに。青年海外協力隊員の藤本めぐみさんが活動する中学校の生徒たちと交流することになった。「地域の人と触れ合いたくてこの委員会に入ったので、アフリカと聞いた時は驚きました」。そう話すのは委員長の加藤裕介くん（6年生）。最初は先生からの突然の発表に戸惑いを見せたが、そこは好奇心旺盛なメンバーたち。まずは〝知る〟ことから始めようと、5年生が中心となって自己紹介ビデオを作ることになった。

「登下校や授業、休み時間の様子などを撮りました。日本の学校について知ってもらいたいなと思って」と副委員長の遠藤あいりさん（5年生）。藤本隊員からも〝お返し〟のビデオレターが届き、少しずつ、セネガルとの距離を縮めていった。

セネガルと日本で一つの絵を描く

そして昨年11月、うれしいニュースが舞い込んできた。研修で来日中のJICAセネガル事務所の現地スタッフ、ママドウ・ンドメさんが、高田小に来てくれることになったのだ。「セネガルの人に会える！」とみんな大興奮。ンドメさんは体育館で、全学年の児童を前にセネガルの文化などについて紹介。その後、交流委員会のメンバーとの交流が行われた。

「セネガルで一番自慢できることは何ですか？」

そう尋ねると、ンドメさんからは予想外の答えが返ってきた。

「〝テランガ〟の精神です」

テランガとは現地語で〝おもてなし〟という意味。誰がいつ来ても、愛情たっぷりのおもてなしで迎える―。そんな人がたくさんいるセネガルはどのような国なのだろうと、みんなが思いをめぐらせていた。

そして12月、この交流の最大のイベントとなる「アートマイル壁画プロジェクト」※がスタートした。「一枚の絵を2つの国の学校で完成させる」というこのプロジェクト。みんなで相談した結果、テーマは「自分の国のスポーツ」に決まった。高田小の子どもたちは冬休み返上で制作に取り組み、約1万4000キロ先のセネガルに、片側が空いた大きなキャンバスが旅立った。

そんな遠いセネガルに、本当に自分たちの絵が届くのか。正直不安もあった。しかし彼らのもとに3月、一枚の写真がEメールで送られてきた。そこには、高田小から送った絵を手にしているセネガルの中学生の姿が写っていたのだ。そして、セネガル側の絵が加わったキャンバスは3月末に横浜に到着。6年生にとっては、最高の卒業祝いとなった。

「世界に目を向けてもらうことで、将来への可能性を広げてほしい」と交流委員会を担当する橋本愛子先生。実は橋本先生は青年海外協力隊OG。日本の子どもたちに外の世界に目を向けてもらいたいと教師を志した。そんな期待に応えるかのように、副委員長の小牧勇登くん（6年生）は「いつか機会があったら、アフリカの文化に直接触れたいなと思っています」と力強く語ってくれた。

セネガルと日本を行き交う両国の子どもたちの思い―。小さな外交官たちが生み出す交流の〝輪〟がどう広がっていくのか、これからが楽しみだ。

※異文化交流の一環として、海外の学校とテーマを設けて一枚のキャンバスに半分ずつ絵を描くプロジェクト。日本では任意団体ジャパンアートマイルが窓口になっている。

高田小と協力隊員の藤本さん（左端）の教え子たちの共同作品

「セネガルの人は優しくて、想像以上に身近に感じました」。JICAセネガル事務所のンドメさんに次々と質問を投げ掛けた

セネガルから送られてきた写真を見せる橋本先生。小牧くん（中央）と加藤くんが、委員会のメンバーに説明する